沿岸域集落における空間構成の特性(2)
－生活行為にみられる行動特性－

日大生産工(院)　○荻野　将志
日大生産工　　宮崎　隆昌

1　はじめに

1-1　研究背景と目的

本研究では、前稿と同様に自然発生的に形成された沿岸域集落の空間構成を調査・分析することで、共同体的性格及び相互扶助機能を保ち続けながらも、個と集団の序列関係を適正に維持している要因を明らかにすることを目的としている。

1-2　既往研究と本研究の位置付け

地域コミュニティにおける領域に関する研究として、小林らの研究[1)]や、青木ら[2) 3)]、高橋ら[4)]の研究等が挙げられる。小林らは、住宅地において共有領域の形成が近隣交際や、行動の広がりを助け、部外者への排他性を強めること。また、青木らは路地のあふれ出しが路地空間利用行為を活性化し、結果的に路地居住者間のコミュニケーションの機会を増大させること。高橋らにおいては、路地や隙間が密集住宅地における有効な緩衝空間として機能することを示唆している。

また、自然発生的に形成された沿海集落において、個と集団の序列的関係を生活者の日常生活の実態から言及した山本らの研究[5)]では、沿海集落において集落内の日常的な生産・生活・交流行為の量や割合が、磯・浜との距離に密接に関係していることを検証している。

本研究は、狭隘な土地に高密度に形成された集落において、屋外空間で日常的に行われる生活行為を観察することから、共同的生活を持続する序列的関係の仕組みを明らかにすることを意図している。

2　研究概要

2-1　研究対象地域

研究対象地域についても前項と同様に、京都府与謝郡伊根町立石地区を選定する。集落内の車道は昭和初期に拡張[注1)]されたもので、調査報告書[6)]によると、「この部分はもともと主屋と舟屋の間にできたニワであり、魚網の修理や魚を加工する場所として使われていた」という。また、ヒアリング調査時の居住者の話によると、「隣り合うニワが連続して道となっていたが、道幅は狭く、互いに傘をさして通れないほど」であったという。

このような経緯は、主に集落の海側に立地する舟屋や、土蔵のもともとの位置を大きく変更することに繋がり、路上からみる舟屋側の景観、空間に変化を与えた。このことは、日常生活や居住者の潜在的な意識に多大な影響を及ぼしたことが予想される。

2-2　研究方法

高密度な集落空間において個が近隣社会との共同的生活を確保・維持する序列的関係の仕組みを明らかにするため、研究を以下のように進めた。

屋外空間における生活行為が発生する状況とその要因を把握するため、行為定点観測を通して、具体的に考察する。ゲールの屋外空間での活動の分類[7)]を参考に、伊根町立石地区の路上での行為を以下のように分類し、その特徴を述べる。

「必要行為」：日常的に反復して行われる日課のような行為で、多かれ少なかれ義務的なものを含んでいる。具体的には家事や仕事、現在の生活を維持する為に欠かすことのできない必要に迫られた活動があげられる。なお、本観測は定点から行われる調査のため、持続して行われる歩行は含まないものとし、行為の発生地点、内容、時間を記録する。

「任意行為」：目的を持たない偶発的な行為。主に、腰をかけての日光浴や、子供が1人でする遊びなどがこの行為に含まれる。目的の場所を特に持つことはないが、そうしたい気持ちと、時間と、場所との関係が行為の発生を大きく左右すると考えられる。

「社会行為」：主に2人以上の行動として会話や挨拶、子供の2人以上の遊びが挙げられる。つまり、同じ空間に複数の人間が存在することで発生するやりとりを指す。必要、任意、社会、いずれの行為からも発展する可能性のある行為で、発生の仕方や状況は多岐に亘るものと考えられる。

これらの行為分類をもとに、行為の分布や繋がり、時刻変化に伴う発生行為の変移を明らかにし、集落空間との相関をみる。

2-3　調査方法

研究対象地内の各世帯を訪問し、住居平面図を採取すると共に居住者に家族構成、日常生活、増改築についてのアンケートや、伊根に纏わるエピソード、住居の使い方についてのヒアリング調査も併せて行った。また、住居の外構、道路についての実測や、住居の屋根伏せ、エントランス位置についても記録した。さらに、屋外空間において行為定点観測調査を一日掛けて行った。本報では、屋外空間行為定点観測で得られた結果をもとに分析・考察を行っていく。

The Characteristic of Space Composition in Coast Region Village(2)
－　The action characteristic in a life act　－

Masashi OGINO, and Takamasa MIYAZAKI

● 行為観察地点　----■---- 観測者の位置と観測範囲

図1　行為定点観測プロット及び、主屋、舟屋、土蔵の配置図

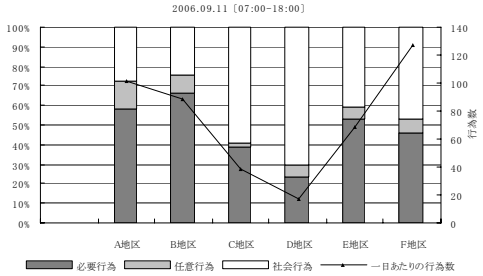


図2　一日あたりの行為数及び、各地区における行為割合

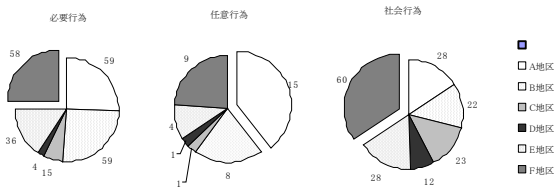


図3　各行為の発生場所内訳

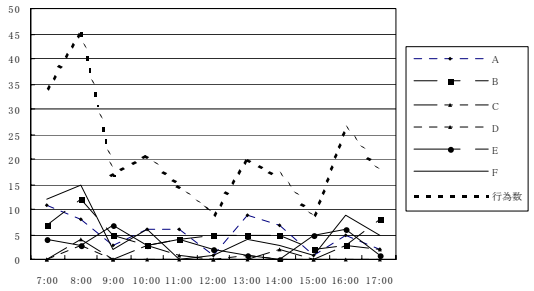


図4　各地区における時間帯別の必要行為量

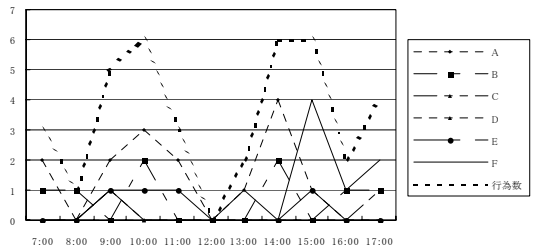


図5　各地区における時間帯別の任意行為量

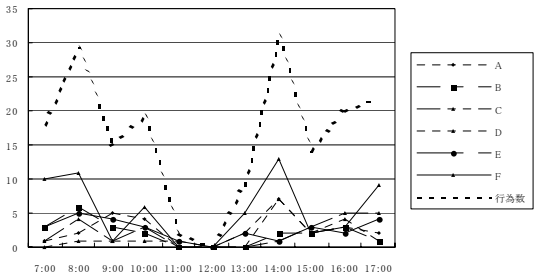


図6　各地区における時間帯別の社会行為量

3　行為定点観測概要

3-1　調査日時と天候について

研究対象地域において、2006年9月11日の午前7時から午後6時までの計11時間、快晴の空の下実施した。調査前日まで連日雨が降り続いており、久々の日和であった為、対象地全体が活発であったことが考えられる。

3-2　観測地点の決定方法と調査時間について

観測は、A,B,C,D,E,F,の6地点(図1)からなり10名の調査員が各自持場を決定し、交替しながら行った。観測地点は、観測者から行為の内容が肉眼で確認できる距離をもとに決定されており、立石地区の道路全体が同時に視認できるよう配置した。また、本調査では同一地点の時間帯による活動の変異や特徴、社会行為の誘発要因の違いによる、人と人の繋がり具合の検討という着想があった為、一日の活動の流れを余すことのないよう連続した時間の中で調査を行うことを目的とした。

3-3　観測方法と記録について

観測にはデジタルカメラを各自用い、行為の具体的な様子と撮影時間を一致させる。原則として、行われた行為は全て撮影し、行為を撮影できなかった場合は行為回数のカウントと行為発生時間の記録の為、行為の行われていた方向に空撮りを行った。また、撮影と併せて研究対象地域をトレースした用紙に、行為の発生した場所をプロットし、別紙に必要・任意・社会行為の起こりとそれに至る経緯、行為が発生した状況、行為の具体的な内容、観測時間を記録した。行為の長さや接続時間についての調査はすべての行為には行わず特に長いものについてのみ、行為終了後再び撮影、記録した。それ以外の行為については、「行為の具体的な内容」欄の観測者の記載を参照し、移動か滞留かの区別を行った。

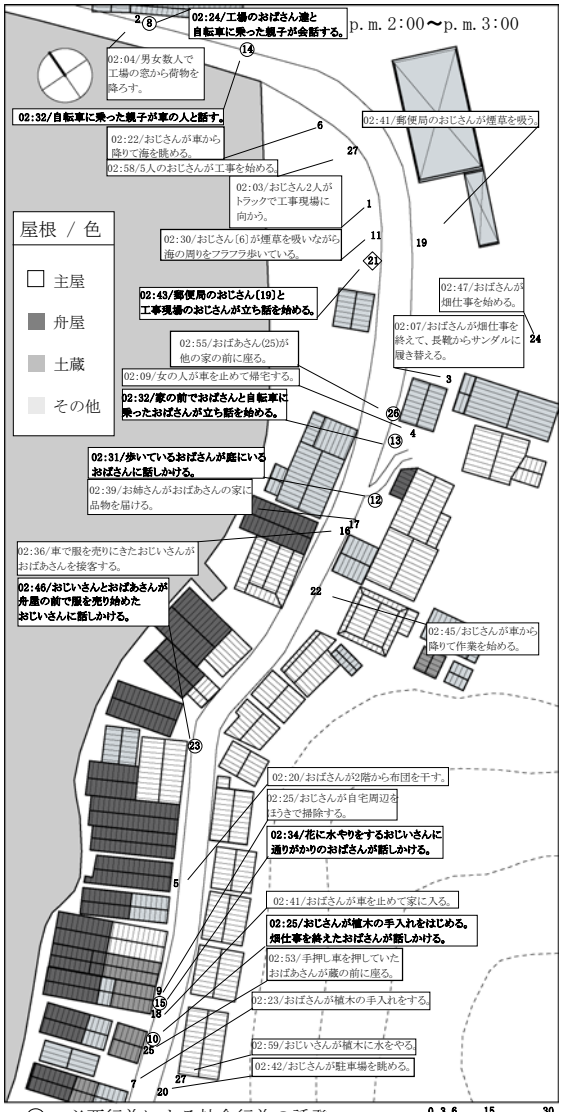
3-4　観測者が複数いることのデータ誤差について

本調査の観測員は行為観測経験者6人と未経験者4人の計10人で行われた。観測に際しては、個々の瞬時の判断が重要となるため、行為の分類方法、記載事項、記載方法について入念に打ち合わせし、誤差が極力小さくなるよう努めた。

4　分析

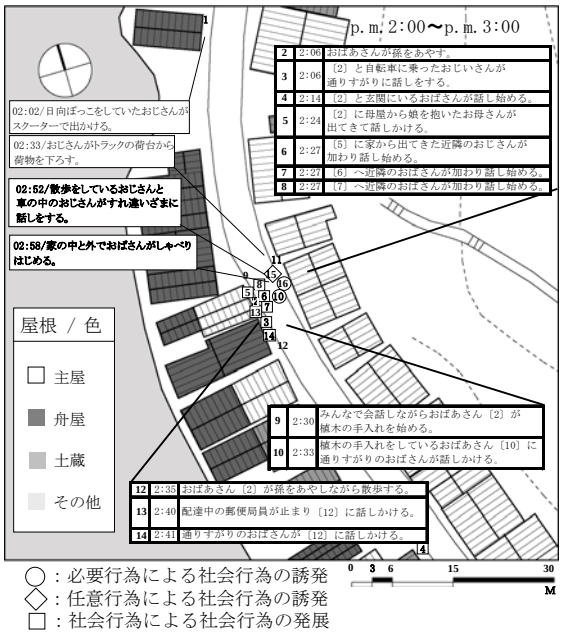
4-1　広域からみた行為分布状況

行為定点観測(a.m.7:00-p.m.6:00)の行為プロットを図1に示す。□1～□6の分布をみると、地区全体における行為の発生分布状況はまちまちであることがわかる。図2 に示した一日あたりの行為数及び、各地区における行為割合では、各地点の行為数は一定しておらず、漁協近傍のA・B地点に比べ、最も漁協から離れているF地点の方が行為数の総体量で上回っていることがわかる。また、E地点においてもF地点程ではないが行為数の上昇が見られる。このことから、集落全体が磯・浜に近接して海岸線に沿うように形成されている伊根町においては、山本[5]が示した「磯・浜からみて間口方向に狭く奥行き方向に広がる集落では、磯・浜近傍ほど多くの活動が行われる」という知見が当てはまらない様子が覗える。



○：必要行為による社会行為の誘発
◇：任意行為による社会行為の誘発
□：社会行為による社会行為の発展

図7　観測区間〔A-B-C〕における発生行為とつながり特性



○：必要行為による社会行為の誘発
◇：任意行為による社会行為の誘発
□：社会行為による社会行為の発展

図8　観測地点〔F〕における発生行為とつながり特性

4-2　生活行為にみる行動特性

図3に行為ごとの各地点が占める行為数の割合を示した。ここで特筆すべきは、A地点における任意行為とF地点における社会行為の多さが挙げられる。「任意活動や社会活動が多いほど空間は活用され、活気ある空間である」とゲール[7]が著書の中で述べていることからも、空間構成と密接な関係にある行為であることが理解できる。そこでA/F地点における生活行為の特異性について、言及することから始める。

4-3　時間帯により変化する行為量と居住者の生活

A.F地点にみられる特質を一日の時間推移の中から集落全体との比較を交えて分析を行う。まず、生活を維持する為に欠かすことのできない必要行為の観測結果を以下に示す。必要行為についてはすべての地点で午前８時前後に最も多くの行為が観測された。これはゴミ出しを観測したもので、図1の中にも局地的に行為の集中がみられる。この時、必要行為に付随して近隣住民同士の挨拶や会話が多くみられた(図6)。午前8時以降は、数時間置きにまとまった数の必要行為が観測されている。これは漁業を生業とする世帯が多く、[注2]活動時間や生活のサイクルが近似しているためだと推測できる。A・B・C地点における行為数についてはあまり違いがみられない。また、A地点では任意行為の最も多く観測された午後2時に多くの必要行為が観測されている。

任意行為については(図5)、午前10時と午後2時にA.B地点において多く観測されており、それに前後する形でF地点においても観測されている。行為の多くは、おばあさんによる任意の場所に「座る」や、景色を「眺める」といったものが挙げられ、高密度に建てられた住居群と、自動車の往来の多い車道を避けたものと考えられる。このことから行為者が座るのに最適で安全なスペース、程よい日照条件、眺望の好い場所を探し、選んでいるといえる。その点においてA地点の海に開かれた場所や、広い空き地は最適である。

社会行為においても、各地点の行為数と時間帯に相関が認められる(図6)。午前8時のゴミ出し時と、午後2時の二時間に亘り多くの行為が各地点で観測された。主に午前中は必要行為による社会行為への発展が目立ち、午後に入ると任意行為や社会行為による誘発が見られるようになる。また、正午にみる行為数の変動から、12時には各々の家の周りで家事や、身の回りの作業に専念する様子が覗える。これは任意行為においても同様で、この時間帯に屋外で活動する住民が少ないことがわかる。

4-4　発生行為とつながり特性

A地点における任意行為、F地点における社会行為の最も多く観測された午後2時についてそれぞれの地点について、行為の発生状況や、発生要因、行為と行為の繋がりに注目し詳細に分析を進める。

A-C区間における行為の分布は一見すると散在している(図7)。A地点で多く観測された任意行為が海辺の広いスペースで行われていたことがわかり(6.11.19)、いずれも時間と場所を離した自由意志による場所選びであるといえる。個々の行為の時間は比較的近接してものも見つけることができるが(7-9-10.12-13)、広い場所と適度な距離が社会行為の誘発を遠ざけているような印象を受ける。

また、B-C区間の住居近傍では、へこみや隙間、道路の脇で行われる行為が目立つ。へこみや隙間などの私有地(プライベート)で行われる行為は、人目につきにくく、他者と結びつきにくい空間構成といえる。このことが任意行為、必要行為の多い区域(A・B)でありながらも、豊かな社会行為の発展に結びつかなかった要因であると推測できる。

午後2時のF地点においては孫をあやすおばあさん(2)を介した行為が連続して会話へと発展していく様子が見て取れる(図8)。そのほとんどが近隣の住人であり、主屋と舟屋の往来の際に会話へと移行している。またこの付近は幅員が3.5メートル前後と狭く、周囲には住居が立ち並び、へこみはあまり見られない。道路は緩やかに曲がっている(図1)が、行為の連続が見られたこの場所からは路上の様子を、遠くまで見通すことができた。そのことが社会行為の繋がりをさらに助けたと考えられ、偶然通り掛った通行人をも巻き込むものになったといえる。

5　まとめ及び今後の課題

本研究では高密度に形成された集落の屋外空間において生活行為を観察することで、生活者の行動特性の把握を行った。その結果から得られた知見を以下にまとめる。

1)集落全体が磯・浜に近接して海岸線に沿うように形成されている伊根町においては、磯や浜、漁協への距離が必ずしも、生活者の活動行為を左右するものとは考えがたい。

2)路上に見られる生活行為の種類や量は時間帯によって大きく変動するものの、生活基盤を同じくする地域であればその変化も近似する傾向にあると考えられる。

3)住居群のへこみや隙間は狭隘な土地に高密度に形成された集落にとって私的な空間となりやすく、見通しの悪さは閉鎖性を増す要因となると考えられる。

今後の課題として、本研究より得られた立石地区の生活者行動特性をより明らかにすると共に、行動特性に起因すると考えられる空間構成とのつながりを把握していくことが課題であると考える。

〔注釈〕

注1)　府道伊根港線拡張工事－昭和六年（**1931**）着工。昭和十五年（1940）完了。この工事は、総延長約5㎞にわたり幅員4mの道路を新設するものであり、舟屋・蔵を海側に移し、主屋と舟屋の間に道路が通された。これにより現在の町並みの基本型が構築される。この時、一部の舟屋が二階建てとなり、さらに鰤景気の度に多くの舟屋が瓦葺二階建てに替えられた。

注2)　舟屋所有世帯数/61世帯 [6]
舟屋を持つ漁業従事者の割合/94% [6]
漁業従事者のいる舟屋の割合/57% [6]

〔参考文献〕

1)　小林秀樹，鈴木成文：集合住宅における共有領域の形成に関する研究－その1　共有領域の構造，日本建築学会計画系論文集，　No.307，(1981.9)，pp.102～111 .
2)　青木義次，湯浅義晴：開放的路地空間での領域化としてのあふれ出し－路地空間へのあふれ出し調査からみた計画概念の仮説と検証　その1，日本建築学会計画系論文集，No.449，(1993.7)，pp.47～55 .
3)　青木義次，湯浅義晴：あふれ出しの社会心理学的効果－路地空間へのあふれ出し調査からみた計画概念の仮説と検証　その2，日本建築学会計画系論文集，No.457，(1994.3)，pp.125～132 .
4)　金栄爽，高橋鷹志：密集住宅地の「住戸群」における路地と隙間の役割に関する研究，日本建築学会計画系論文集，　No.469，(1995.3)，pp.87～97 .
5)　山本健司，宮崎隆昌：沿海集落における生活空間の構成上の特性と「距離感覚」に関する研究，日本建築学会計画系論文集，　No.605，(2006.7)，pp.31～38 .
6)　伊根町・伊根町教育委員会：伊根浦伝統的建造物郡保存対策調査報告書，(2004)
7)　J.ゲール，北原理雄訳：屋外空間の生活とデザイン，鹿島出版会，(1990)
8)　小林茂雄，萩原史郎，中村芳樹，村松陸雄：路上行動の行いやすさに与える環境要因と対人的要因，日本建築学会計画系論文集，　No.515，(1999.1)，pp.97～103 .
9)　エドワード・ホール，日高敏隆・佐藤信行訳：かくれた次元，みすず書房，(1970)
10)　佐々木正人：アフォーダンス－新しい認知の理論，岩波書店，(1994)